

《特別寄稿》

「私の受けた語学教育」 そして「これからの語学教育」

市 村 佑 一*

●私の受けた語学教育&語学とのつきあい

(1) 第二次世界大戦後から 1960 年代の英語

「ギブミ・キャンディ」「サンキュー・ベリマッチ」——まだ小さかった頃、大変役に立った最初の英語である。第二次世界大戦の敗戦後、しばらくは奈良市内の鷺池のそば、閑静な住宅地に家族で疎開したままであったが、その隣接地に駐留してきたアメリカ人将校のもとに配属された隊員達にかけた言葉である。すぐ上の姉のいうとおりわけもわからず声をかけると彼らは喜んでキャンディーやチューイングガムをくれたのである。そのうまかったこと。そして中学校で初めて「英語」を学ぶことになる。教科書は「Jack and Betty」。先生の発音は当然関西訛りであったが、章ごとにいくつかの短文にアンダーラインを施して来週までに覚えろと暗記させられた。しかしこれは後に話す時に意外に役だった。父親のアドバイスで英文日記をつけていたのもその頃である。シンプルな内容だったがスペルを綴ることで単語を覚え、一方、研究社の中学生向け月刊英語雑誌の懸賞問題にも応募、時折入賞していた。それ以降は、国語の文法学習と同様に英文法を基礎にした英作文そして読解という形で高校～大学へと重要な必須科目の一つとして受験英語の流れに乗せられていったのである。

大学の2年間、教養課程では第2外国語がドイツ語というクラスに属していた。当時はまだドイツ語が主要外国語の地位にあった。第3外国語にフランス語を取ってみようかと授業をのぞいてみたら発音が鼻にかかるような「軟弱な言語」に思え、友人とともに直ちに脱落した。しかしこれは後に大きな反省材料となる。英語の方は『チップス先生さようなら』の輪読、ドイツ語はゲーテの『ファウスト』を読んでいく記憶があるが、外交官出身の先生は耳から学ぶようにとしばしばリンガフォン（レコード）を授業に利用されていた。

(2) 仕事を通しての異文化体験

その後英語とはあまりつき合うこともなく過ぎていったが、ある時勤務先のNHKで南アジアの取材を命じられ、2か月間インド、パキスタン、ネパール、スリランカなど5カ国を廻った。それぞれの国の国営テレビ（ラジオ）局の職員が同行してくれ現地の人たちとのやり取りは彼らを通じてその地の言葉で行った。つまりコミュニケーションの基本ツールは英語であった。お互い同業者であるので認識できるテクニカル・タームがあればある程度話は通じたのである。この時役に立ったのが中学時代の英語であり、暗記させられた文章であった。勿論中身の細かいところやニュアンスについては辞書も活用して考えなければならないが、現場では瞬時の判断が必要なので多少曖昧なところも多く、厳密な解釈は帰国後ということになる。当時はマスコミの世界でもまだ海外経験のある人は少なく、今と違ってケータイもファック

* 江戸川大学学長

スもない時代である。例えばインドから日本への国際電話はつながるのに6時間待ち、勿論カードで支払うシステムもなくすべては米ドル（トラベラーズ・チェック）のみ。また、英語を話す人が多いインドにしても「アングル・リベル」（橋の下）などという具合にそれぞれに訛りがある。そこで簡単な日常語はその国の言葉で話すのが一番と、パキスタンでは「カンコロ・シャワシャワ」（働け）ネパールでは「ナマステ」（こんにちは）「ダンネバード」（ありがとう）など挨拶や感謝の言葉を使うようにした。やはりその国の基本言語を少しでも話すことが信頼感を得るきっかけになるものと思われる。

その後スイスのバーゼルで開催された EBU（ヨーロッパ放送連合）のセミナーに出席、日本の教育放送の現状を紹介する機会があり、ほぼ1週間英仏独の言語別に設けられた部会で缶詰めになって討議したことがある。この会合に参加しているただ一人のアジア人ということで新聞で紹介され、初めて訪れたヨーロッパでもあり、心細い毎日であった。バーゼルはドイツ語圏に属しており、夜な夜な行われるレセプションでは日本のドイツ語事情について問われることもあり、たまたま学生時代第2外国語で記憶していたドイツの詩人カール・ブッセの有名な詩「Über den Bergen」（山のあなたの空遠く、幸い住むと人のいう）の一節を詠じたところ周りの人々が驚嘆、そこは若気の至り早速便乗して日本の大学生はこの程度は「皆諳んじている」といったので一同興味津々となった記憶がある。

この後海外出張の機会が急速の増え、とりわけ興味をひかれたのがパリでありフランスの文化の奥深さであったが、残念ながら簡単な日常語以外は何もわからず、まさに大学時代にフランス語を選択しなかったことのつげが回ってきたのであった。今やフランス語の入門書を読んでもなかなか頭に入らず、あきらめの境地で毎年パリに通っている。

こうしてみると、語学というのはコミュニケーションの要をつかさどるもので、できるだけ当人

たちの身近な言語で接するということが必要であり、上手下手は別として何をいおうとしているのかを当事者同士で補いながら進展していくものではないかと思われる。

ヨーロッパの名門チームに移籍したサッカー選手の多くが、その国の言語をたどたどしくとも話しながら記者会見している姿をテレビなどで見ていると、さもありなんとと思う。

後年、テレビによる国際放送（NHK ワールド・テレビ）の設計に関わり、イギリスやドイツ、アメリカ諸国の海外発信力を研究しながら日本からロンドンとニューヨークを拠点に世界中にテレビニュースや番組を配信できるネットワークの構築に取り組んだことがあるが、当時英語で発信できるニュースや番組の数があまりにも少なく、驚いたことがある。いまや法的にも整備され予算の裏付けもでき世界全域のほぼ100%をカバーし、英語使用のコンテンツも徐々に増加してきたが、残念ながらまだまだ発展途上にある。2020年のオリンピックがどれだけの起爆剤になるか、日本の国際的コミュニケーション力が問われている。

●これからの語学教育

(1) ある友人の体験と提言

受験専門の学習塾が流行る現在から見ると信じられないかもしれないが、今から半世紀以上も前、私の学生時代にたまたま商才に長けた友人のアイデアにより6人の仲間と浦和市内の母子福祉センターで中学生向けの学習塾を開いていたことがある。当時多かった母子家庭の子弟教育に寄与するという観点から教室の無償提供を受け、英語、数学、理科の3科目を手分けして教えていた。最盛期9クラス350人を超える塾となったが、家庭教師気分の抜けないうち中学生に週に1回英語を教えていた。地元の学校で使用している教科書を中心に自分がかつて教えられていたようなことを説明し、どうすれば英語が面白くなるかを身近な例を出しながら教えていたような記憶がある。しかし実のところ取り立てて何を教えたらいのかはわからなかった。どちらかといえば遊び相手だっ

たのかもしれない。同じように英語を担当していた仲間に樋口祐一という友人がいた。卒業後大手銀行に入りニューヨークやロサンゼルス支店長を務め、現在家族ともどもロサンゼルスに永住している。勿論英語は彼の得意科目であった。現在文部科学省では「世界に通用する日本人を育てるための英語教育はどうあるべきか」という目的で英語の教員をアメリカにグループで短期派遣しているようだが、彼はしばしば現地でのサポートを依頼され、その時感じた体験から2014年の春、日本の英語教育のあり方について次のような提言をしてきたことがある。

日本の英語教育の現状について派遣教員の方々に尋ねてみたところ、「文法、読み、書きは良いが、聞くことと話すことは駄目だ」といわれたという。小学校低学年から英語教育を取入れようとする試みが進んでいるなかで、彼は自分が英語を学んでいた5、60年前と全く変わっていないんだと聞き驚いたという。そういえば彼は入社3年目にニューヨーク勤務となり意気揚々と赴任したところ、日常会話が聞き取れず話もできないという状況に陥り、英語に自信を持っていた彼が「電話が鳴っても怖くて手が出ない」状況となったという。慌ててネイティブ・スピーカーの先生について会話の勉強をし直すこととなる。大きな声を出しての反復練習、会話を単語で捉えずに文章として音でとらえるよう訓練をして、とにかく「聞く話す」ことに徹したという。そうした反省もあって日本の英語教育について次の3点を指摘している。

- 英文和訳、和文英訳、文法偏重の教育を是正する
英文を英語で理解し、英語で考えて話すからこそ「使える英語」になる。英語を聞いて日本語に直して理解し、日本語で考えて英訳して話をしていたら、会話にはついていけない。学校の試験では英文の理解度を英語で答えるものに直す等
- 「使える英語」を身につけさせるため教師は英会話ができること

• 「音」で捉える英語教育の充実

英語の理解、上達はそれに触れている時間に比例して向上する。それゆえ学習を年齢の低い頃から始めること。加えて英語を目で捉えるのではなく、音で捉える訓練をする。耳から入った英語をそのまま口から出す。これが「使える英語」の基礎になる。週に1時間程度の英語教育では上達は難しい。くり返し、易しい言いまわしを反復練習、耳で覚えることが大切。幼児向けのフォニックス(Phonics)なども教材として活用できるのは――

「もともと語学の習得とはコミュニケーション手段を確保することに過ぎない」と彼はいう。この手段を使って日本人としての誇りと知識を持って世界の人々に自分の意見を述べるのが求められる。そのためには日本の歴史、文化、政治、経済など基礎的な知識を普段からもっと身につけておくことが必要である。そうしたうえで留学や海外勤務の希望者を増やす努力が必要だという。

(2) 体験と実感の英語学習

確かに江戸時代、350年におよぶ鎖国の中で細々と取り組んできた蘭学教育では、多くの日本人はオランダ人と殆ど接触できないところで蘭学を学ばざるを得ず、やむなく文法中心の日本独自の「読み書き語学」の手法が完成していったのである。近代国家になっても急速にはこの考え方は変えようもなく連綿と語学教育に引き継がれ、第2次大戦後アメリカが駐留する時代になっても基本的には解決できなかったといってよい。ラジオ、テレビ番組も会話力の向上に寄与するツールの一つではあったが微々たるものであり、かつて我々も車の中でFEN(現在のAFN)のニュースを聞いたりしたものなかなかついていけないのも事実である。リスニングとスピーキングは会話の基礎、とはいえ日常生活と密着した形にはなりえず、今日にいたってしまったのである。

ともかく日常生活のなかで会話ができる環境が

必要であり、基本的にはその中に入っていくしか道はない。江戸川大学で開学以来取り組んできたニュージーランド研修はその一つの方策であり、研修の中から語学に目覚め海外に雄飛した学生は数多い。語学は「興味」と「関心」さえあれば、あるいは生きていくために必要であれば必ず使える

ようになるものである。

眼で見、耳で聞き、口で話し、身体で感じる、これがコミュニケーションの基本なのである。「非日常の世界」ではなく「生きた語学の習得」に向けて、いろいろな知恵を結集して「会得」できる道を求めたいものである。